

平成三十年八月十日発行  
皇學館論叢第五十一卷第四号 抜刷

秦恒平「或る雲隠れ考」

——妖しい血縁の物語——

永  
栄  
啓  
伸

# 秦恒平「或る雲隠れ考」——妖しい血縁の物語——

永 栄 啓 伸

## □ 要 旨

源氏物語の源典侍に題材をとり、この色好みの老女を執拗に語る「私」の真意を探った。時間を編むように構成される物語は、阿以子と私の愛の世界と、千代と井荻家の人々をめぐる世界に二分されるが、「ちゃんとした」生まれを持たない人たち、すなわち妾の子、不倫の子、貰い子、私生児などの、血縁への受容や拒否を描くことで、作者に内観を強いる〈血〉への固執や怖れについて検討した。発端は、井荻徳蔵が妾の舟の子千代を家に入れ、一度不縁になった千代を番頭の弥一と再婚させるため、すでに弥一との間に阿以子をもうけていた佐和と別れさせ、このとき阿以子を井荻家別家の跡をとらせることを示唆したことにあつた。やがて阿以子は千代の養女となり、千代は本家との確執のすえに狂い、発作のとき、流産したわが子を「私」の中に幻視する。阿以子は今では「私」と不倫関係にあり、千代の還暦の祝いの日に、「私」との不倫の子を墮胎するという。ヒステリーの千代と奔放に生きる阿以子を中心に、貰い子「私」の眼を通して母と子の問題を考察した。また、源氏物語では本文を欠く「雲隠れの巻」が、「私」として、語るに語れない生母に関わる空白を背負っていること、さらに千代と佐和が対面する末尾が、もはや死なれてしまった生母を取りもどすために二人の母の融合をはかる幻想の場でもあることに注目した。

## □ キーワード

秦恒平 或る雲隠れ考 血縁の輪廻 二人の母の融合

## (1) 私の「雲隠」の巻

この作品は「新潮」(昭和四十五年六月号)を初出とするが、『湖(うみ)の本』<sup>(注1)</sup>にいたるまで、機会あることに手を加えられてきたことは、原善の指摘する通りである。いま手元にある西澤書店版『雲隠れの巻』<sup>(注3)</sup>と講談社版『初恋』<sup>(注4)</sup>を比較しても、主に導入部の源氏物語を中心に五十行をこえる削除、改変がなされている。講談社版への改変によって現行のテキストに近いものになったと思われる。

はじめに、詳細な自筆年譜に見られる記述からおおよその成立過程をたどってみたい。<sup>(注5)</sup>

昭和三十七年 一月 白楽天の詩に取材した小説、「源氏物語」の源典侍に取材した小説などのプランを作りはじめ、習作の手始めも。

昭和三十九年 二月 新たな「或る『雲隠』考」起稿す。

三月 「雲隠」考四十一枚まで書いてヒロイン登場。

五月 「雲隠」百二十枚まで進み作のヒロインと継母対面に至る。「書けるといふことは何と心を軽く広くさせることか。」

六月 「雲隠」百七十五枚クライマックス直前まで暫くぶり喫茶店「ボン」で書く。成り立たぬ愛がある、「分らないことばかりだ!」

七月 「雲隠」のヤマを乗り越えることは「また現実の壁に精一杯当たること」であるとも。此の一年を危険で背德的で充実していて、意義有る一年と感じる。

十二月 初稿「或る『雲隠』考」を二月二十六日起稿以来の脱稿に漕ぎ着ける。

昭和四十年 二月 「或る『雲隠』考」二百八十六枚で第二稿成る。

四月 「或る『雲隠』考」第三稿迪子の浄書成る。二百四十六枚。

昭和四十三年十二月 「或る『雲隠』考」百七十七枚で定稿を得る。後年に改稿改題して「雲隠れの巻」とし、さらに改稿して原題に戻すなど、この作品には再三手を加えている。

プランを作り始めた前年の昭和三十六年二月には、「生母深田(阿部) ふう死去」の記述があり、同年三月には「生母ふう(筆名阿部鏡・歌人) 訃報来」「身内」とは何かを切に思い直す」とある。また昭和三十八年には、「羽衣の人(ちの畜生塚)」に取り組み、「次第に「身内」観の表現を文学の主題と考え始む」とあり、昭和三十九年十一月には、十月の『懸想猿(正・統)』に続き、私家版『畜生塚・此の世』を出版、さらに昭和四十一年十月に『斎王譜(のちの慈子)』(蝶の皿、鯛、斎王譜、を収載)を私家版で出版し、昭和四十四年二月には私家版『清経入水』(清経入水、掌説集・絵、或る『雲隠』考、祇園会の頃、を収載)を刊行している。ちなみに、これは昭和四十四年六月に太宰治賞を受ける以前の活動である。こうした創作活動の大切な底流をなすように、この作品は長い間書き継がれてきた。

さて、源氏物語五十四帖のなかで「雲隠」の巻は本文を欠いている。その前の「幻」の巻から後の「匂宮」の巻まで八年が過ぎ、その間に光源氏は出家しやがて死んだことを、本文のない巻の名が語っているといわれる。「私(宏)」は中学生のころ、三学年上の井萩明子から与謝野晶子訳の源氏物語二冊本を借りて貪り読んだ記憶があるが、その明子もすでに結婚して姿を消している。雲隠れの巻を思い出させたのは、明子の従妹井萩阿以子であった。上述の年譜には、昭和三十九年三月の項に「『雲隠』考四十一枚書いてヒロイン登場」とあり、阿以子を中心人物であることが知れるのだが、小学六年生の頃に転校してきた同学年の彼女とは、秦恒平の多くの作品に見られるように、現在、不

倫の関係を続けている。年譜には続けて「未来はもはや挿話などと言い通れる術もない脅迫である。私が筆を持ったのは感動のためでなく、この脅迫のためである」と当時の日記らしき引用がある。この「脅迫」は、六月と七月に見られる「成り立たぬ愛」や「現実の壁に精一杯当たる」ことにも関わる作者の「背德的」な心情であり、阿以子の生き方を通して、奥深くひそめた背徳の愛と、自らの出自や血縁の問題に真摯に立ち向かわなければならぬ状況にあったことを窺わせる。

東京の「私」には妻子があり、妻もうすうす気づいているが表面には出さない。京都に住む「二十八歳になる」阿以子（昭和十一年三月生）は、かつて本家の初と衝突して家を出たことがあるが、今では藤間流の舞踊の師匠となり、二年まえから月に一度上京して教えていたことを「去年の夏」に知った。時間を織り込むように作成される時系列は複雑に前後して特定しにくいのだが、注意を喚起するように何度も繰り返される「去年の夏」から一年後の現在（昭和三十八年）を、ひとまず作品の基準時としたい。これは後に述べる千代（明治三十六年生）が来年還暦を迎えるという、比較的たしかな時間軸に裏打ちされた設定である。

阿以子の出奔は、本家の井荻初（昭和四年生）が二十三歳で結婚した年と記述されるから昭和二十七年と思われる、三年目に戻ってきたから昭和二十九年か三十年、その頃から「私」は阿以子と「いとこぐらいの隔てなさ」で会っていたという。ともに二十歳のころと思われる。七、八年まえに雲隠について話したとあるので、特に深い関係になったのは、「去年の夏」のあとの十月、渋谷の宿からである。しかしその関係は、「畜生塚」などに見られる（絵空事）とか（身内）の世界とか呼ばれ、世間とは離れたところに構築される緊密な愛の仮構空間のようには見えない。阿以子の挑むような眼や姿態に官能性を認める反面、「一昨日」の感慨として、「私はつくづく阿以子の顔を見た。秀でた額から頬へ、奇妙に女のやつれがみじんで見えた」（三）や、「情念には烈しさも美しさもなかった。恋という気組み

が私にはなかった」(十八)とか、「疲れが残るのである。どこかでからだに触れ合っている、ただそれだけのことが  
気うとくて、互いにぼかんと天井を見上げたり枕スタンドで青白く掌を透かしてみたりして過ごすことになる」  
(十八)といった言辞には、いまや倦怠感、さらには阿以子からの遁走すら願っている趣きがあるのだ。

その理由を推測すると、年譜には着想、執筆の時期が二度記載され、昭和三十七年には「白楽天の詩に取材した小説、「源氏物語」の源典侍に取材した小説などのプランを作りはじめ」たとある通り、前者は同年に書かれる「或る折臂翁」であり、後者が「或る雲隠れ考」である。かなり早期に着想された小説であることがわかる。秦文学の重要な主題のひとつ、身内観が強く反映された「畜生塚」(原題「羽衣の人」)は昭和三十八年に起稿されているから、当初のプランでは、いまだ阿以子と「私」の關係に、不倫とはいえ、世間と対峙する緊密な愛を描くという発想は強く持っていなかったのだろう。もう一つは、昭和三十九年二月に「新たな「或る『雲隠』考」起稿す」とある記述で、本文に照らせば、「阿以子の方からわざわざ言い出さなければ、遠い以前の「雲隠」考など、じつを言えは想い出しくもなかった」(二)と語られることから、「以前の「雲隠」考」は典侍を中心に千代を語るものであり、阿以子に促された「新たな」ものは、そこに阿以子との關係性を加えて構想されたと想像される。「雲隠」考は完成されることはなかったけれど、阿以子によって語られる千代の物語として決着したようである。

それでは、源氏物語を貸してくれた明子を慕いながら「大人の世界を品隠しつつづける隠微な視覚が着実に育まれていた」(十二)という、「私の「雲隠」とは何なのだろうか。

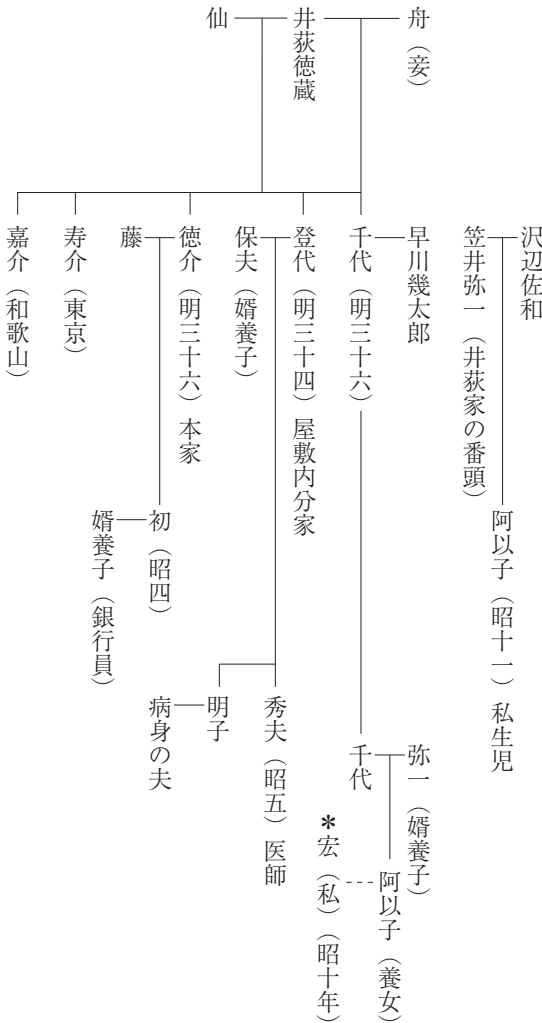
源氏物語の「紅葉賀」の巻にみえる、光源氏と親友頭中将(葵の上の兄)が老女に関わるところを次のように記している。

紅葉賀の巻には源姓の内侍のすけ（典侍）で五十七、八になる老女のあさはかな色好みのさまが、光と頭中將との滑稽な鞘当てを添えて、挿話風に書かれてある。桐壺更衣の死を嘆く帝に藤壺入内をすすめたのと同じ典侍であろうか、この老官女は、後段でも一、二度顔を出すけれど、まず此処だけの人物である。色好みの老女と面白半分まではたち前の貴公子たちとの絡みが抜群で、主役は、老女の花ごころである。（二）

色好みの老女にまつわる哀しみやおかしみを舞に仕上げてみたい、というのが「私」の着想であった。加えて「朝顔」の巻からまた二十年、私の「雲隠」の巻を白寿にほどない老女の物狂いとして、それも舞踊の形で書いてみたかった」と記される。舞踊家の阿以子が寝返りながら「雲隠れのはなし、今でも書いてくれはるか」と七、八年前の話を思い出す。阿以子が振り付け、舞いたいと言うが、「老典侍を舞える女ではない」「光源氏とは見えない、せいぜい頭中將の役どころ」である、と「私」の評価は高くない。しかし色好みの老女の挿話には「気味のわるい印象」があり、「原作者の思惑はさておいて、奇妙に蠢くまるで別の眼でものを見ている自分に気がついた」と述べられる点に、また、藤壺が産んだ美しい皇子は光源氏の子供であり、後に冷泉帝となる、この「罪の子」のイメージが全編に流れていることに注意しておきたい。なぜなら、「私」が述懐する数少ない素直な心情の吐露に「だが、私の場合のように、単に事実としてすら生みの両親と一緒に暮せた日が一日もなかったのと較べたら」（七）という一節があり、真の親子を体感できなかった貫い子の問題という痛切な苦しみが感知されるからである。究極のところこの作品には、作者の内なる母と子のテーマを手探りする様子が見てとれる。「私の「雲隠」の巻」は、単に舞踊にとどまらず、「私」の内部を貫く妖しい血縁をめぐる物語なのである。

(2) 井荻家の系図——妖しい血縁

構成は大きく二分される。すなわち「私」と阿以子が形づくる愛の世界と、千代をふくむ井荻家をめぐる人々の愛と怨念の世界である。さらには、弥一と佐和に関するもう一つの物語が伏流している。千代から阿以子へと続く血縁の流れを「私」は「井荻家」という大きな家系の底に隠れたこの一脈の隠水（二十）と見なし、井荻徳蔵から始まる」と明言しているので、家系図を見ながらその内実を検討したい。



秦恒平「或る雲隠れ考」(永栄)



阿以子は古美術商井荻家の番頭笠井弥一と沢辺佐和との間に生まれた。昭和十二年、弥一と千代が結婚する前年の三月である。弥一は佐和と別れて婿に入り、阿以子は認知された。その阿以子が小学六年生のころ、京都へ転校してきて「私」と同じ学年になる。結婚後、子のなかった弥一と千代の養女として滋賀の膳所から貰われてきたのである。昭和二十一年秋、十歳の阿以子が京都で千代に初対面したとき、千代は四十三歳、佐和は三十六歳であった。年譜に「ヒロインと継母対面」と記される場である。静寂な法然院の奥の部屋から謡曲の稽古が聞こえていた。思わず、あれは隅田川、と千代が言った。連れ去られたわが子を追って母が隅田川まで来ると、すでに一年前に病死したことを知らされる謠いであった。そんな、子を失った母の嘆きが伝わって、そのとき佐和は「黙って頭を垂れていた」。阿以子には理解できないが、いま「私」には二人の母の苦しい胸の内が想像できるのだ。

育みそだてるべき子を喪って、我が為にはあだし女の娘を引きとろうと決心した千代と、そうと知った佐和の神妙な応対を今想像してみると、この隅田川的情景は紛れようもなく二人の気もちそのままであった。(十六)

また、夫の愛は佐和に向けられ、満たされぬ愛欲に身を焦がしながら怨めしい夜を過ごし、やがて諦め、わびしい生活を送っていた千代が、阿以子に逢ってみようと決心するときの心情が次のように記される。

母を貫き子に流れた痛い閃光のようなものを感じた。その光が自分のからだに飛びこんだまま何処かへ消えてゆく途を探しあぐねている。佐和——という人に逢ってみよう。夫とその女の仲に生まれた阿以子とかいう娘の顔を見てみようと千代は決心した。(略)母より寂しい半生を顧るのは何にともなく怨めしく哀しかった。失って

しまったものの小さな影が、哀しみにかぶさってくつきり浮かぶのが何処かに見えていた。(十)

母の舟が産後まもなく死亡したので、千代はひとまず大阪の祖母に引き取られ、祖母の病死後は徳蔵の手配で井荻家に入った。しかし幼いころから登代は「妾の子」として蔑視した。自己を顧みるとき感じた「痛い閃光のようなもの」とは、妾として生きた母と、妾の子としてそして養女として生きた自分の運命の謂であろう。そして「閃光」の行き先を、つまり血の受け手としての可能性を千代は阿以子に探している。おそらく似た境遇になるであろう阿以子を、いま、井荻家に迎える千代は阿以子の行く末を思い自らの半生を重ねずにいられない。登代はかつてと同様に、阿以子を「よその子」と言つてのけた。弥一や登代への怨念が少しずつ千代を歪めていく。

また「失つてしまったものの小さな影」とは、流産した子のことであろう。先夫早川幾太郎とは不縁になり井荻家に戻った千代は、弥一と再婚するが「間なしに」「妊娠していた」とある。この妊娠は弥一に疎まれ「不運な流産」となり弥一を安堵させた。千代はこの時のみず児を男の子と信じ、「似た年恰好の私」に幻をもとめる気配があった。昭和十一年三月生まれの阿以子と同学年の私(昭和十年生)に、昭和十二年に流産した子を重ねて、繰り返される血の定め次第に沈鬱になり、自己を壊してゆく。千代の自己崩壊の過程は貫い子の「私」の心に重く共鳴する。しかし子を奪われた母の苦しみと、わが子を得られなかった母の嘆きにも思いを馳せる作者は、佐和と千代の双方の母親の慨嘆にふれることによって、血縁が齎す母と子のありようを描こうとする。

貫い子と生母について、原善は『みごもりの湖』(昭和四九・九 新潮社)の帯広告に記された「戸籍面の事情複雑。謎に鎖されたまま母に死なれ、五歳までの生い立ち、不明。年来この生の空白を凝視、暗い此の世の海を埋めるべく創作の筆を執る」を引きながら、秦文学の本質に言及している。

秦恒平の文学的な営みは空白を埋める営為だということになるのだ。この〈生の空白〉が秦文学の特徴である、独自の身内観や死生観を培っていくことになり、「或る雲隠れ考」の宏にしてもそうだが、彼の文学の主人公たちは、貫い子という生い立ち故か、愛する人に〈死なれる〉かで、喪失感・欠落感という形の〈生の空白〉を抱え、作品の中を生きるのである。

もつとも作者の生い立ちにおける〈生の空白〉と、作品自体が内包する読みの〈空白〉とは区別されねばならないが、ともに生母に関わることを鋭く察知し、その一例として、描かれない阿以子の心理もまた大きな空白であると指摘した。

### (3) 「ちゃんとした生まれ」でない子たち

問題点をより明確にするために、千代の異常性について具体的に検討したい。

「私」が千代と関わりを持つのは、茶の湯、生け花を教える叔母が千代や登代の幼なじみだったことに因る。「私」自身は千代の発作を二度見ていると言うが、最初の発作が千代を襲ったのは阿以子の家出の直後であった。千代に連れられて本家に挨拶に出向いた阿以子は、同じ貫い子の冷たい仕打ちを受けて以来、七歳年上の本家の跡継ぎ娘の初に反発していた。その初の婚礼の日の朝、阿以子は出奔した。初は「千代を面罵した。「井荻の恥」ということばも当然のように出た。「ちゃんとした家のちゃんとした娘はんなら、こんなあほな真似おしやすやろか」と言われた晩、烈しい発作を起こした。妾の子としての冷遇、差別に耐えてきた心が傷つき折れたのである。

ちゃんとした生まれでない子とは、妾の子、私生児、貰い子、不倫の子、そういった総称として本家の初は蔑み、責めていた。その基準で見れば、世間的には千代も阿以子も「私」も該当するが、それは単に人柄より親が結婚していたかどうかに帰する問題だ、と阿以子は反発したのである。結婚という世間の慣習、家という封建的な制度への反逆であった。養子、養女を虐げ、蔑視する「ちゃんとした」生まれの者に拒まれたことに対する反抗であった。その意味では、千代の発作も類似の行為と言える。

さて、初めて「私」の前で異常と思える行動を起こしたのは、夏祭りであった。家出した阿以子が戻る一年前だから、十八、九の「私」は盆踊りに参加した。阿以子の町内にまわってきたとき千代は家に入って休むように言った。弥一は留守であった。静かな部屋に通され、縁づたいに隣の座敷へ入ると立派な仏壇があった。燈明が上がり、供え物も多い。

柄になく燈明など見入っていたことで照れていた。照れて部屋を出ようと踏み出した時、かん高い声私の方へ「ぼん」と呼んだ。飲物の入ったコップが受皿の上でかちかち音をたて、黄色い液体は千代のからだと一緒に暗い翳になって傾いだ。思わず私は、すくんだ。そろそろと近づいて来る足どりが、眼つきが、さっきまでの千代とは思えなかった。

「どう、しやはったん」

私は上ずったままあと退った。踊囃子がどっと遠くでにぎわい、千代の小さな影がゆらゆら揺れている。膝から震えが来そうで私は千代の両肩を圧すように揺すった。顔は見なかった。(十二)

このあとコップを取り落とした千代は小走りに仏壇の前へ進み、右手を燈明の方に差し出している。「ぼん」と呼びかける千代が幻視したのは紛れもなく亡きわが子であった。仏壇には、子どもを偲ばせる「小指の先ほどの金無垢の大黒天」が大切におさめられていたのだ。この挿話に関して、このとき「あの源典侍の妖しく狂い舞う姿を私は幻覚した」と言う。狂った千代の出現がなぜ「雲隠」と関係するのか。なるほど、二十歳前の光源氏や頭中将を誘う色好みの老女典侍が五十七、八歳であった、あの「紅葉賀」の巻の人物配置に照らせば、五十代の千代と二十歳前の「私」はほぼ該当する。しかし千代をそっくり「あさはかな色好み」の老女と見なすにはいくぶん無理があり、作者の言わんとするところは他にあると考えねばならない。

もう一度は、叔母が知恩院で稽古釜を掛けた翌日、「私」は学校からの帰り井荻家に礼に立ち寄ったときである。阿以子に誘われ二階の踊りの稽古場にあがった二人が唇を重ねていたとき、茶を運んできた千代が目撃して狼狽する。物が散乱する音がして「千代の真白なちいさな顔が、生首を据えたように階段の下からぬっと出ていた」。そのとき「まるで舟ばたに錨をかけたようにぎゅつと両手の爪を階段の途中に食い入らせて、硬直していた」。

手早くのべた床に枕をはずして寝させたが、何かのはずみで千代はごろっと俯せになったかと思うと、枕でも腹にあてがった恰好で背を高くまるめて動かなくなった。「おばさん」と呼び「お母さん」と叫んで両方から肩に手をかけたが、千代は一言だけ「ぼん」とうめいて、やにわに阿以子の手を引き寄せて噛みついた。この人は正気や、と思ひ、そう思いながら私は「お医者さん呼んでくるわ」と玄関へとび出した。(十五)

「ぼん」と呼びかけていることから「私」にわが子を投影させていることは前回と同様である。さらに養女阿以子の

手を噛むのは、「私」を奪われまいとする母の所作と解することができる。しかし千代の視線が「叱責」より「咎めていた」と記され、「この人は正気や」と思うところを考慮すれば、義母として、自分と似た境遇の阿以子へのたしなめや牽制、そして「ちゃんとした子」でない子どもたちの振舞いを諫める気持ちも加わっていたと見るべきであろうか。そこには繰り返される呪わしい血の輪廻への怯えがある。「私」は作者の声を代弁するかのように次のように述懐している。

結婚できなかつた男と女の苦痛に較べると、同じ二人から洩れ出来た子どもの心やそういう親と子の関わりの方に遙かに苦い毒の味が残る。そうではないか、人間の血が濃く粘って濁り始めたのはこうした親と子の余儀ない定めが性懲りもなく反復されたからだ。自分がそういう子で、また親ともなつたことを嘆きはしない。しかし、この私自身が「ちゃんとした子」であつたように、弥一と佐和の子の阿以子もそう、徳蔵と舟の子の千代もそうなのだとな得するのは、やはり肌寒く底気味がわるいのである。(二十)

引用箇所「ちゃんとした子」は、西澤書店版も講談社版も「破倫の子」と記されていた。あくまで表記の統一上の改変かと思われるが、「私」は貫い子として描かれているので「破倫の子」は適切でないと感じたのであろう。千代は妾の子であるけれど、阿以子は私生児だが破倫の子ではない。「私」もけつして破倫の子ではない。そうすること、図らずも「私」はずっと作者に近づいたわけだが、実はこの独白のなかで「親と子の余儀ない定め」が反復されるところに血の濁りを認めているのは、現在、阿以子が「私」の子（まさに破倫の子）を宿しているという、新しく開示される事実に因る。しかし考えてみれば、この妖しい血縁の物語はすべて、徳蔵が妾の子千代を井荻家に入

れ、一度不縁になった千代の婿養子として番頭の弥一を迎えるに当たり、佐和と別れさせ、娘の阿以子を認知して井荻別家の跡取りの可能性を述べたことに始まったのである。

#### (4) 千代の還暦祝い——反逆する阿以子

千代の容態は悪かったけれども、四月十一日に法然院で還暦を祝う茶会が催された。これが物語の現在である。弥一はもちろん、叔母も登代も藤も「私」も妻も出席した。叔母の弟子の藤木瑤子も手伝いにきて初々しく点前に出たけれども、本家の初と阿以子の姿はなかった。阿以子はその二日前に上京して「私」と逢い、還暦を祝うその日に自分たちの子を墮胎すると言った。それは、ちゃんとした生まれでない子を蔑む井荻家への「憤懣」であり、私生児という「ちゃんとしなない」血筋に運命づけた井荻徳藏、弥一、千代に対す反発であった。そして原善が「私」への「悪意」を読み取ったように、血の継承を拒む心理には、当面の相手「私」への愛憎もあったはずである。

何万年もの昔から紛れもなく滴りつづけてきた糸のような一本の血筋を今自分のからだにつなぎとめている。「自分さえ頑張つてそれを指の間から洩らさなんたら、こんないやらしい、しょうもない生命たらいうもんをまたしても誰ぞに引き継がいで済むのやもん」と阿以子は言った。(十八)

本来なら、身籠った不倫の子を墮胎することによって血縁への反逆を表す前に、まず不倫をなしたことへの自責や悔恨があるはずだが、阿以子はそれには広く肯定的で放埒で、むしろ自分から誘惑した気配さえあり、そのうえで遠

く徳蔵から続く血縁からの訣別を宣言する。血脈に対する復讐劇と呼んでもよいのだが、この決意は同じ時期に書かれた「怨念論」(昭和四五・九)<sup>(注七)</sup>を強く連想させる。人は(生まれる)という絶対の受身によって、生まれる前の無限の世界から有限の世界に切り離され、絶対の孤独の始原となる。したがって(生まれる)行為には、生まれる以前の無限への回帰願望が潜流していて、人は生まれたことへの悔いを持ち、生んだもの、すなわち直接的には父母への怨念が生じる、と作者の血の原理を語ったものと理解されるが、ましてや「ちゃんとした」生まれを持たない人にとつて、生まれた悔いはいつそう深刻なものにちがいがなく、それを背負って生きる苦悩が千代や阿以子や「私」に投影されていると見てよい。阿以子にすれば、私生児とはいえ、もともと井荻の血を引いていないのに、千代の養女になることで井荻家の血を継承しなければならなくなったことにも「憤懣」があるのだ。それは佐和が弥一と別れる際に齎された、「阿以子はまかり間違えば、井荻別家の跡をとらせる外孫だから大事に育ててもらわないと困る」(八)という、佐和の「胸を熱くさせた」徳蔵の書状に端を発しているのだが、そうした(血)の継承を余儀なくされた阿以子は自らの手によって遮断し、第二の(千代)や(佐和)になることを決然と拒否するのである。

その強さは義母千代に対する「冷笑」となって表される。「生みつけられた出来損ねの卵が、辛い思いで成長して、その挙句、生み損ねた卵のことで半分狂ってしまったのだから、還暦もへちまもあるわけなく、死んだ卵の冷えきった殻を抱きながら、そういう自分の一生を生きたまま葬ってやる儀式」(十八) みたいだと還暦の茶会を皮肉る。この一節は、千代の姿をとらえた的確な比喩である。そして「生みつけられた出来損ねの卵」である千代が、「生み損ねた卵」(流産)によって狂い、「死んだ卵」を抱きながら死んでゆくような一生を阿以子は拒否する。

しかし一方、「私」はと言うと、還暦の祝いに合わせて墮胎しようとする阿以子の覚悟の行為を「冷笑の演戯」だと考えて何の感動もおぼえない。偽悪のポーズを強いたのではないと言うけれど、不倫の結果として同様に「生み損



ねた卵」を持つことになる阿以子の未来を危惧するようにも見えない。むしろ東京に阿以子を残したまま、妻子を連れて京都に遊び、「生まれぬ子の葬りのために指先一つ動かさずにいる」身勝手さを自覚している。血の継承の悪夢に脅えながらも、妻子との現在の結婚生活を乱すまいと無関心を装う自己保身は、秦文学の登場人物によく見られる男の身勝手さであるが、阿以子の行為を「千代のように生きながら自身を葬ることになる前に、生まれる前の子を今――葬っている」と、冷静に対処しようとする冷淡さが見られる。

ここで改めて、血の継承について考えると、阿以子は弥一と佐和の〈血〉を受け、弥一と千代の〈血〉は流産によつてすでに途絶えて、代替として幻視によつて「私」に転化されている。その阿以子と「私」の〈血〉はいま墮胎によつて葬られようとしている。つまり、「私」と阿以子の子は、弥一の〈血〉を唯一受け継いだ存在であるゆえに、「私」には受け入れがたく、弥一を嫌い、墮胎にも冷淡でいられるのだ。千代の幻覚を通じて「私」も弥一の〈血〉を継承しているかと想像すると、この血の濁りはいっそう薄気味悪いものになる。さらに弥一を嫌う理由は、千代の夫であり、妄想の〈父〉であるからである。この妄想の〈父〉弥一への厭悪が、千代との再婚のとき「誰の眼にもぬけぬけと弥一は千代の婿に成り変わった」(七) と思い、会うと「奇妙に圧迫される」「弥一を厭な男と思う」(八) とも言い、「弥一の異様さ」(十八) とまで語られるのは、原善が指摘するように、「弥一との同質性を自らの中に見出し」たせいかもしれない。また阿以子も「父への厭悪が芽生えていた」(十二) ので、胎児は必然的に墮胎される運命にあった。また、「私」が悪夢のなかで見る、閻婆鳥の「喚声を聴けば腸も砕け恐怖は三世に及んで消滅しない」という「怪しい輪廻」におびえ、「猿ともつかぬ獣が血膿の溜った眼を怒らせ」うずくまっている〈すだま〉を恐れるのも示唆的である。「あれが千代を喰い荒らしているすだまなのかも知れないと、幻覚の生々しい血の匂いにまた脅えた」とある。しかし、なぜ、「私」の脅える悪夢が千代と同じものだと「私」は感じ取れるのだろうか。なぜ、「私」はかくも

根源的な血への不安を抱いているのか。千代と「私」との妖しい接近や二人が同じように暗部で脅え慄かなければならない異様さが示すのは、「ちゃんとした」血筋を授けられなかった母の悔恨と、授からなかった子の痛みの反映であらう。

そうした痛みに関して、「私」は法然院の近く、疎水べりを歩きながら、阿以子の墮胎を思い「無気味に冷え切つて一つの細胞が細胞のまま土の底へのがれて行くだけ、それを葬りと呼ぶのは感傷というものである。この半日、幾分かの居ずまいのわるい自覚があっただろうか」（二十）と自問する、この冷淡さと血への烈しい脅えの共存はどこから生まれるのだろうか。「私」が幻視する「生々しい血の匂い」とは、血縁よりも直接的に墮胎されるわが子を意味する。不倫の子の誕生は、正しく輪廻できない「怪しい輪廻」の継続だから、その脅えは阿以子に婉曲的に墮胎を薦めるのだ。そして上述の冷淡さは、墮胎すると言った阿以子の決断に寄りかかっていると云つてもよい。

先に見たように、千代の苦しみは、まず、佐和を心の奥に秘め、情欲の疼きに応えようとせず、流産のあとでも冷たく接した弥一への怨念、さらに妾の子として登代や初ら本家から受けた冷遇、そして最後に流産した自己への悔恨、などが考えられるが、何よりその底辺にある孤独であった。千代は発作時、血膿を滴らせてもがき苦しむわが子を幻視するかのよう、「頭をかかえ畳にもぐりこみそうにして、もだえ」「かん高い叫び声」をあげる。「昆虫のような姿勢」とも記される姿は、妊婦のようであり、胎児のようでもある。母胎回帰の願望を示唆する行為は、生命の源流への遡行にほかならず、生まれた悔い、生んだものへの怨念を抱きながら、生まれる以前の無限への回帰を切実に願うようである。

ところが別の発作では「からだを巻きこむが、やがて耳を蔽わせる罵詈をとめどなく吐き散らす」攻撃性を伴う。相手は登代であった。こうした放心、発作の連続は、意識の混濁に伴う自己崩壊の過程で散見され、沈鬱のうらで、

意識が薄らぐにつれて抑圧されてきた怨念が今まで見たこともない激しさで立ち現れる。こうした意識の狭間で苦しむ千代の姿を透して〈血〉への厭悪を描くことは、作者にとつて先の年譜記述にあるように、一種の救いであつたとも推測されるが、千代に見られる、この怨念の両面性に関して、「怨念論」に次のような記述がある。

この他者への攻撃的に向かう強い悪感情とほとんど同時に、同程度かもっと複雑な強さで自分自身に爪をかけて来る鋭い心の動きがある。ことに性格的に外向きに攻撃的になれず、逆に屈折し抑圧されて感情が内攻する場合には、ほとんど同義的にだぶつて自分へ切り返して来る心の動きがある。それは、思わず唇を噛み、齒噛みし、絶望し、うちのめされ、生きる気をなくしそうな、純粹に自分自身へ、しかも究極的にはかくも此の世に生まれたことを痛嘆するような心の動きであり、これが「怨み」「恨む」ということなのだ。

さらに、怨念の定義として「絶対への回帰の祈願」であると言い、「紛れもなく、喪われてしまったものへの、それは渴きの如き愛である」と述べて重要である。ほぼ同時期に書かれた「怨念論」は失われた愛を語つてこの作品を綿密に裏打ちすると言えるだろう。

## (5) 幻視の世界——欠落したピース

物語の末尾を解釈するのは容易ではない。還暦の茶会が終わり、西日の当たる頃、千代はひとりで亡き母の墓参に出かけた。「私」夫妻の見守るなか、墓地から帰ってくる千代にひとりの女性が近づいてくる。

千代が墓地から下の参道へ下りようとした時、ちよとど同じその所へ一人の婦人が足早に姿を見せた。白い足袋さきが湿った土の道から浮き立って、風呂敷包みを小さく抱えた左手首が着物の袖をすつと抜けて出ていた。婦人の顔ははじめ近寄って行く私たちの方を見たが、すぐにそこへ下りて来ようとする千代に真向かって、急に停まった。歩みも停まった。

千代は俯きがちに、よそへは気もちが届かなかつた。

「奥さん——」

そう呼びかけた声は、阿以子が私を呼ぶ声と同じだった。千代の顔が、ゆっくり動いた。だが、かさかさした白い表情は冷え冷えと引き沈んだまま、今はもう何事をも認めようとしていなかった。

沢辺佐和は、包みを抱いて立ち竦んだ。

「おっ師匠さんのお母さんだ」と私は慌てて囁いた。

「こわいわ」

妻は私の腕をつかんで顔を伏せた。胸の中で、何かが、ぐちゃっと潰れて、流れはじめた。

阿以子の生母と養母が顔をあわせる場面だが、なぜ佐和がこの場に登場するのか明らかでない。招待されたとは書かれていないが、そうかもしれない。しかし初や阿以子や「私」の娘のように欠席者は話題に上がっているが、噂の一つも出ない佐和が突如として登場する。「足早に」とあるから当然用件があつて追つてきたのであろうが、還暦の祝いに駆けつけたのでは、「こわいわ」という妻の言葉にあるように、この場の雰囲気にとぐわらない。今回の還暦の

茶会は、千代にとって「本意ない口惜しさで泥まみれの過去の中へのめりこんだまま、生きながら我が身を葬るべき一つ墓碣を標する、哀しい一期の一会に他ならない」特別の催し故に、阿以子から聞いて不意に顔を見せたのか。阿以子の話では、「娘を棄てた傷手」のため近年は教団に入って熱心に布教していたために膳所へも「足を向け洪っている」とあるが、連絡は取り合っていたと思われる。そうだとしても千代とは日頃から交流があったようにも見えないので、不審な緊迫感が漂うのである。

秀逸な論を展開する原善は、この末尾について、「作品の力学によって」「佐和が不在の阿以子の代わりに」登場するとして、「阿以子の二人の《母》の対面という意味」を読み取っている。そして「子を産めなかつた千代と、子を奪われた佐和、という二人の《母》の対面する場面は、その両方を否定した在りようとしての、子を拒んだ阿以子の姿を背景に透かしながら、どす黒く血の澱んだ場面」であり、「だからこそ続けて、澱み鬱血した血がぐちゃっと潰れて流れはじめ」るイメージが喚び起こされる」と指摘し、さらに、この場に「対立する二人の《母》とは、千代と佐和以外に、宏の妻と阿以子との一組が在るのだ」と丁寧に分析している。

では「作品の力学」とは何なのか、なぜ二人の母が「対面」しなければならぬのだろうか、なぜ「対立」するのだろうか。

最後に、弥一と佐和の世界についても考えておきたい。この二人は表舞台には登場しない。そしてすでに見たように、「私」も阿以子も弥一を嫌っているが、ただこの物語は阿以子の伝聞にもとづく要素が多分にあり、「どこまで事実を伝えているか確かめるすべもないまま、私は、弥一を厭な男と思う」(八)とあるように、語り手の眼が届かぬ死角があることに注意しなければならない。もちろん千代や弥一については「私」の方から聴き出したことも多いのだが、「私」の眼に映る弥一像の幾分かは、阿以子の感情に色付けされた弥一でもあるのだ。たとえば阿以子が弥一

を嫌うのは、血の問題というより、単に佐和を捨てて千代と結婚したという「選択」に憤りを感じ、結婚は不公平だという怒りに発している。総じて阿以子は、顔をこわばらせて血の復讐を演じる、捨て鉢とも見える大胆さと同時に、奔放で細かいことに拘らない鷹揚さを併せ持っている。それが「私」に「阿以子は深刻には考えていない」(十七)と思わせ、「私のずるさ」が顔を出す所以なのである。

もつとも弥一にしてみれば、佐和との間に阿以子を儲けてそれなりに暮らそうとする時に、大旦那の徳藏から持ち出された、佐和と別れて千代の婿になるという話は、損ではないにしろ理不尽さを覚えたにちがいない。徳藏の書状と手切れ金を持ち帰った時も、無邪気に阿以子と遊ぶ姿は親子三人の安寧さすら漂わせる。阿以子にはその記憶はないにせよ、「父親は阿以子を溺愛した」(七)とも、初対面の日には「膳所で見るとはまた違った笑顔」(十一)とも記されるから、十歳で養女になるまで父との団欒を記憶していないはずはなく、だからこそなぜ千代と結婚したのかと父を詰るのである。そうした、愛する女と別れて結婚するという展開は「畜生塚」の町子の父啓三と似た構図をもっていて、啓三は「愛していた人をあきらめて」養子に入ったが「心はいつも病んでいた」。母はそんな夫に尽くしたが報われることはなかった。町子を夢に封じ込めた愛と呼ぶなら、阿以子は現実に放埒と呼べるくらいに行動的である。それに較べ、弥一に啓三と同様の苦しみがあつたのかわからないが、「三十四、五の年から井萩の大きな屋台を弥一は熱心に支え」、徳藏が死に、家督が徳介に譲られ、時代が変わった後も井萩家に「気重な心配りをつづけた」功労者であつた。なるほど「生まれのひがみと産みのひがみいうて弥一つあんも言うたはる」と千代の愚痴を語るの嫌味だが、これも叔母の伝聞による。年を経ても低い姿勢は崩さず、心の奥に佐和を抱いて言葉少なに生きる姿を、「私」はじゅうぶん理解できていたのだろうか。感知できないことが、弥一を不気味で異様な男と感じさせていたのではないのか。

また、佐和の境遇は、千代に似て、一度嫁いだが弥一と知り合った当時は係累もなくひとり「小さな暖簾店」を出していた。弥一は当初、優柔不断で処遇を決めかねていた。結局、徳蔵が直談判に出かけ、佐和は弥一との別れを承諾して阿以子を失うことになった。弥一や阿以子への思慕を持ちながら徳蔵への怨めしさも抱きつつ生きたであろう。これは作者の生母の境遇にも通じそうだが、佐和は阿以子を井荻別家の跡取りにという徳蔵の言葉を頼りに、我が身を犠牲にして慎ましく生きて来たと思われる。

しかし、ここで阿以子が「井荻の母と膳所の母とを一つにして二つに割ったもの、それが自分」(十一)と考えていることは重要である。阿以子の存在理由ともなるこの考えは、阿以子が義母と生母を融合して許容していることを示すもので、作者が生母を考えるうえで、両面性を対立ではなく融和へ向かうことを示唆している。表面上で語られる狂った千代の〈母〉のイメージと、伏流する佐和の優しく見守る〈母〉のイメージを哀しい母の総体として受容するためにも、末尾での佐和の登場は必要だったのだ。

さて、末尾の法然院の場合は、千代と阿以子が初対面した場の再現を意識させる。阿以子を養女とすることで「井荻別家」の血筋は担保されたが、厳密には舟から千代へ、そして阿以子へと受け継がれる血筋は歪んでいる。千代と阿以子の間の断絶を埋めるためには佐和の参入が、さらには千代と佐和の融合のための幻想空間が必要であった。

「奥さん——」という呼びかけは、西澤書店版も講談社版も上下関係をうかがわせる「奥さま」であった。用があったて近づいた佐和は、自分の世界に籠って生きる屍のごとき千代の自己放擲に思わず「立ち竦んだ」のだ。鎖され立ち入れぬ距離を感じさせるこの言葉に対立の気構えはない。もとより千代にも佐和に対する憎しみはなく、「憎み切る気根の枯れている千代」(十)であった。佐和の用件は阿以子の欠礼を詫びる訪問だったかとも思われるが、注意す

べきは、うつろな千代がその声に反応したということである。佐和の声は「阿以子が私を呼ぶ声と同じ」であった。鎖した千代の心を開くのは阿以子の声であった。千代は佐和に阿以子を幻視したのであるか。あるいは「奥さん」という声は「お母さん」と聞こえたのかもしれない。不在の阿以子を挟んで二人の母の間に緊張が漲る。融合という幻想のための緊迫である。物語としての求心性を考えると、二人の母の融合へ向かうと見るのが妥当であろう。そのとき妻が「こわいわ」というのは異様な状況に発した言葉であろうが、同時に彼女がこの幻想の母の世界とは無縁であることの証左でもある。妻の側にいる「私」も「弾きだされている」という原善の指摘は至当なものである。さらにその時、「私」の胸のなかで「ぐちゃっと潰れて、流れはじめた」ものは、阿以子の墮胎を連想させる。この時阿以子は「私」との子を葬り去ったのだ。本文から当該箇所を探せば、「私」の胸の中にあるのは「東京の産院のベッドに上がっている阿以子の、孤独な硬い表情が私一人の胸の底へぎゅつと来て、離れない」(十九)ものであつたらう。そうであればこの時「私」自身の安堵が暗示され、それは千代の流産のときの弥一の心情と重ねることができると同時に、胸の中にわだかまっていたわが母を喪った体感を読むこともできよう。突如生じたものでなく今まで抱いていたものが潰れるのだから、「私」の雲隠れという血縁をめぐる千代への幻想と言つてもよい。千代が「私」にわが子を幻視する構図を反転させれば、千代のなかに母を見る「私」の陰画とも読めるからである。(すだま)の悪夢を共有する所以でもあろうが、この時点で「私」は阿以子からも、千代の幻想からも解放されたのである。

この物語は幻視、幻覚によって橋渡しされる(事実)が重要と思われるが、では結局、血縁をめぐる「私の「雲隠」の内実とは何だったのだろうか。

雲隠れの巻は、本来、本文を欠落した巻であつた。そこに光源氏の死を想起させる巻であつた。具体的には「私」



が、色好みの老女典侍をイメージした舞踊を書いてみたいと思うものであった。「紅葉賀」の巻に見える、五十七、八の典侍と光源氏ら二十歳前の若者との関係から、千代と「私」を連想させるものであった。しかしながら、すでに述べたように、千代に色好みの老女を当て嵌めることには少し無理がある。じっくりこない。つまりこの作品には根本的に欠けたピースがあった。深層の物語として、語るに語れないひとつの事実があった。それはなぜ「私」がこれほど千代に固執するか、なぜ血に拘泥するかという問題に繋がっている。千代に仮託して語るひとつの闇、それは「私」自身の生母の影ではなかったかと思う。すでに子を持っていた母は、当時は寡婦で下宿人を置いていたが、その下宿人である十六歳も年下の学生との間に二人の子を儲けた。しかし結婚には至らず、結果「私」は父母の籍に入らず、父方の祖父の計らいで貰い子に出された。その「本意ない口惜しさで泥まみれの過去」を生きた、つまりは思うようにならない人生を苦渋にみちて歩んだ千代への視角は、ためらい戸惑いながらも「私」の隠された闇である生母(注9)に向けられていた。それが「私」を突き動かした「葬りの日の哀傷」(十三)の内実であり、哀惜に混じって、ひそやかに湧きあがる憤怒や伏流する怨念を内に認めながら、もはや死なれてしまった生母をどう受容すればよいのかという葛藤ゆえの、書かれざる空白こそが「私」の雲隠れの正体ではないだろうか。

## 注

注1 秦恒平『湖(うみ)の本 17 加賀少納言・或る雲隠れ考』(一九九〇・一二)

注2 原善「或る雲隠れ考」(秦恒平の文学―夢のまた夢―(一九九六・一一 右文書院)。以下、原氏の引用はすべてこの論に拠る。

注3 『雲隠れの巻』(一九七五・四 西澤書店)

注4 『初恋』（一九七九・一〇 講談社）に「或る「雲隠」考」として収録された。

注5 自筆年譜（『湖の本 52 自筆年譜（一） 全書誌・他』（二〇〇九・三）。以下、年譜からの引用はすべてこれに拠る。

注6 注2に同じ。

注7 「怨念論」（『婦人公論』一九七〇・九）。『湖の本 エッセイ2 花と風・隠国・翳の庭』（一九九〇・三）から引用した。

また、拙論「秦恒平「畜生塚」をめぐる——伏流する怨念の物語」（『皇学館論叢』第五十卷第四号 二〇一七・八）も参照された。

注8 注2に同じ。原氏は「ぐちゃっと潰れて、流れはじめた」ものの内実について、墮胎を始め、「私」と阿以子の関係や、また「私の「雲隠」の巻」の着想」などの可能性に言及している。そして「私」が「嫌な男と思」うという弥一との同質性を自らの中に見出しつつ、それでも傲慢に高を括つていられた阿以子との関係」や、「光（源氏）の影だとも言える好色な弥一に繋がる男の宏は、弾きだされている」というような弥一像に関する深い読みには首肯されるが、やや夙罰的な趣があるように思われる。

注9 注2に同じ。原氏は「やはり秦恒平にとっては作品の表面上のテーマには浮上してきていないものの、母を（死なせた）思いは大きかったのであり、そこそが「或る雲隠れ考」の（気にかかる）ことだったはずなのだ」と、母の死の重要性を指摘している。

注10 秦恒平「母なる近江」（『湖国と文化』一九七八・一）には「現姓の秦家へは数えどし五つの夏に貰われた。多少の記憶はあるが、それ以前のことには長いあいだ知らなかった。去年の三月まで、およそ四十年私は自分の生い立ちを知らずに暮らしてきた。（略）だが、戸籍謄本で私の生母が滋賀県神埼郡の現能登川の人だっただけは京都の大学に入る時分から知っていた。右の文中に「母に死なれ」とあるが、死を看取ったのではなく、人伝てに訃音を聴いた。昭和三十六年春さきだった。翌年、

秦恒平「或る雲隠れ考」（永栄）

突如として小説を書きはじめる大きな動機になった」と記される。また「母の死・出会い」〔海〕一九七二・八〕では「母との死に別れは、私にとって小説世界の漕ぎない重ね扉を一枚一枚開いて行く確かな鍵との「出会い」になった。偶然の一致ながら私の青春を埋めていた短歌とも別れ、私は小説の筆を二十七歳ではじめて手にした」と、母の死と作家への出発の関連性を述べている。

（ながえ ひろのぶ・近代文学研究者）